

特集：映画監督 野村岳也

『糸満の女』 『イザイホウ』

1968年 / カラー / 27分

1967年 / モノクロ / 49分



糸満の女

この作品は1968年に製作されたが、一度テレビ放送されただけで長い間眠っていたものである。元はフィルムであるが、数十年の歳月に原版は傷み果て、今では傷ついていたこの映像だけしか残ってはいない。

当時、私は製作スタッフとともに、男は海へ女は畑へ、あるいは男が魚を獲り、女がそれを売るといったようなシンプルな暮らしをさがし求めていた。複雑化した現代社会では、そのような基本形態が殆ど見られなくなっていたからである。そんな古拙な社会には失われた祈りがあり、愛があった。ある意味でこの作品は糸満に対する私たちの思いを描いたものであり、したがってナレーションなども現実にとぐわらない表現があるかも知れない。私は、海を仲立ちとした男と女の生が、墓という死の家へ収斂されてゆくそんな形を見ていたのである。ドキュメンタリーとしては独断と偏見が先行しているかもしれないが、その映像はまごうかたなく1968年の糸満の姿をあらわしている。 野村岳也

※『糸満の女』は海燕社の小さな映画会でのみ上映。



イザイホウ

沖縄県南城市の久高島は、昔から神の島として知られ、年間三十に及ぶ神事が、島の暮らしに組み込まれており、今でも島人によって厳粛に受け継がれている。この久高島最大の神事が、十二年に一回午年に行われる「イザイホウ」である。

「イザイホウ」は、30歳から41歳の島で生まれ、島に生きる女が神になる神事で、四日間の本祭を中心に一ヵ月余の時をかけて行われるのである。島の女たちは、ノロを中心に神女組織を構成して島の男たちや島の暮らしを守ってきた。

これは、1966年の「イザイホウ」の記録作品である。

「イザイホウ」はその後1回行われ、1978年を最後に消滅した。多くの祭や神事が時代の波とともに形骸化し観光資源に変身したケースの多いなかで、「イザイホウ」は厳粛な神事の心を失わず、生きてそのまま消え去ったのである。

「イザイホウ」はまた、ドラマチックな構成を持ち、歌や踊りの原点ともいえるべき内容を有し、学問上でも価値の高い稀有の神事であった。今は、この記録映像で、その魅力の一端を感じてもらいたくするのである。 野村岳也

【野村岳也】 1933年1月23日生まれ。石川県七尾市出身。長年にわたり映画監督としてドキュメンタリー映画等の制作に携わる。『イザイホウ』(1967年)『糸満の女』(1968年)は、野村監督が30代に手がけた作品。2012年にメガホンを取った『ふじ学徒隊』(海燕社製作)は、映文連アワード2012文部科学大臣賞を受賞。2020年5月24日逝去。享年87歳。

特別上映

『映画監督・野村岳也』

2020年製作 / 12分



沖縄県の緊急事態宣言発令中(会場閉館の場合)は映画会は中止です

※上映会に参加の際は、マスク着用、検温、手指消毒にご協力ください。当日、熱、咳、だるさを感じたら、来場をお控えください。